

◆パネルディスカッション

司会（松原恵美 氏）

大崎上島の海と船をテーマに、海・島・船など地域資源や魅力について有識者の方を交えさまざまな角度から討論をしていただきます。それではさっそく講師の皆様をお呼びいたします。

まずはパネリストの皆様方からご登場いただきます。それではご紹介申し上げます。

まず、大崎上島町の権伝馬船を展示していただいております三重県鳥羽市意味の博物館館長でいらっしゃる石原義剛様です。どうぞ拍手でお迎えくださいませ。

続きまして海外漁業コンサルタントとしてご活躍中の森本孝様です。続いて中国新聞編集委員でいらっしゃいます佐田尾信作様です。続いて地元大崎上島町より広島商船高等専門学校教授でいらっしゃいます松島勇雄様です。

それでは最後に本日のコーディネーターをつとめていただきます、大崎上島町のお生まれで現在、広島県の職員そして広島県交流・定住促進協議会の営業部長としての肩書きをお持ちでいらっしゃる谷川正芳様です。それでは進行を谷川様にバトンタッチいたしましてお話を進めていただきます。谷川様よろしく願いいたします。

コーディネーター（谷川正芳 氏）

皆さんこんにちは

本日はこんなにたくさんお集まりいただき本当にありがとうございます。進行役、コーディネーターの大役を承っております谷川です。どうぞよろしく願いいたします。

のっけ冒頭からお断りというほどではないのですけれども、2点ばかりお断りをしておきたいと思います。1点目、これは個人的な話ですけれども、昨日から風がたくさん吹くというか春一番が吹いて春爛漫というか、要するに花粉がたくさん飛んでいます。マスクをされている方もおられます。実は先ほど薬局へとんで行き、きつい薬を飲んで鼻が出るのをやっと止め、頭はくらくらという状態なのです。進行上も支離滅裂にならないようがんばりますので、まず1点目ご容赦いただきたい。2点目、今日はパネリスト4名の方皆さんでございます。お手元のパンフレットで肩書き、著書等ご覧になられるとわかると思うのですが、大変全国的にも著名な皆さんでございます。本来であればおひとりずつ基調講演をいただいてもしかるべきお方でございます。そういう意味で、今日のパネルディスカッションの所要時間は1時間20分でこれまで定刻で進んでおるわけでございますけれど、2点目のご容赦ということでそれぞれじっくりお話をきかせていただきたいということで少し時間が延びると思います。これはぜひご容赦いただければと思います。

それではパネルディスカッションに入ります前に私の方から少し前振りをさせていただきます。前振りするにあたって、前半の見延先生の「瀬戸内海と頼山陽」の瀬戸内海。また、中学生の方の発表の「権伝馬」という話が出ました。その中で非常におことばとしてうけたまわったことがそれぞれ1点ずつあります。見延先生の方では、現場を

見て歩く、これによって頼山陽が生きてきたという中で「現場を見て歩く」というお言葉が大変心に残りました。木江中学校の発表では「20年後を考える」ということが大変大切な事だと思いました。東野中学校では、みんなの意見のところがすごくいいと思いました。「女の子も参加できる」「大崎、木江の人にも一緒になってもらう」そして「みんなの息を合わせる」というそれぞれ心に残った言葉が1点ずつ特にございました。このパネルディスカッションにあたって、その視点を活かしながらそしてそれぞれの専門の立場からより具体的な熱いお言葉をいただければと思っております。先ほど2点お断りをしました。今度は2点という言葉がキーワードになってきているのですけれど、皆様にぜひ2冊というか全部で3冊になるのですが本をお見せしたいと思えます。なぜお見せするのかというと、頼山陽は200年前の江戸期、先ほどの木江中学校のお話は20年後、東野中学校は今ということで、それぞれいつのことを語っているのかというのがあります。ここにある「地域文化の再発掘」の再発掘とは何かというと、「何時の時にどういうことがあったか。何を見てきたか」というところを掘り起こしていくことが必要になってくると思えます。それと瀬戸内海全体で見るのか、大崎上島として見るのか。大きな点と、足元の地点。これをどう見ていくかという点で2つの著書をお見せし、話を聞いていただきたいと思えます。あとで話す本を先に見せるのですけれど、中国新聞社の「瀬戸内海」。これはえらい古い本です。上下で書いておられます。昭和32～34年に取材をされ、発刊は35年。50年前に出された本です。もう1つ、これは40年前の本だと先ほど森本先生が教えてくださいましたが、宮本常一編「新日本風土記 日本に生きる ～瀬戸内海編～」その冒頭等を書いてあることをぜひ先ほどの前半部分の話をこのパネルディスカッションにつなげるという意味でご紹介したいと思えます。

まず、1冊目ということで「新日本風土記」これは小・中学校の方を対象に書かれた本で図書館にあるものです。まず企画編集が日本観光文化研究所、実はこれ森本さんがおられました。そのはじめのところを宮本常一さんという方がお書きになっています。読ませていただきます。

『大阪という街は日本では東京に次ぐ大きな街です。その大きな街が発達したのはいろいろの原因があるでしょうが、その中でも最も大きな条件になるのは、瀬戸内海に面していたということでしょう。瀬戸内海というのは中国と四国と九州にはさまれ、大阪の南の紀淡海峡。淡路島と四国の間にある鳴門海峡。四国と九州の間の豊予海峡。九州と本州の間の下関海峡にかこまれた東西に長い海。もとは瀬戸内と呼ばれていました。というのはこの海には実に多くの島があり、島と島の間は瀬戸になっていてその中には潮流の極めて早いものが多く、一見平和な海のようにですがまた危険も多かったのです。ただこの海の沿岸に工場が林立しなかった以前はいたるところに白砂の浜と松原が見られ、海の水はきれいに澄み魚介も多くしたがって漁業も盛んで漁村も多かったのです。そしてまたその内海一帯は、夏は降雨も少なかったから天気を利用する製塩業も発達し、いたるところに塩田を

見かけました。そして日本で必要とする塩の大半はここで作られ、多くは船で各地に送られていきました。その上17世紀の終わりごろからこの地方でサツマイモの栽培が行われるようになると、食料をそれまで賄うため山地を開いて段々畑を作りたくさんのサツマイモを作り、段々畑は内海の宝物の1つとして人々に知られるようになりました。一方地味の肥えた田や畑には綿を植え、糸を紡ぎまた布を織ったものでした。このようにして食べるものもあり仕事もあれば人はだんだん増えていきます。人が多くなって自分の島で働き口の無い者は出稼ぎに行きました。その最も多かったのは船子（船乗り）でしょう。船子というのは水夫のことです。瀬戸内海はたくさんの帆船がいました。その船は日本海方面に塩を積んで行き、帰りには米や綸子、にしん、昆布を積んでくるもの、あるいは江戸や大阪の間のいろいろな物資を運ぶもの、九州のほうへ酒を積んで行き海産物を積んで帰るもの。あるいは北九州や山口県宇部地方で掘られた石炭を内海の製塩の燃料として運ぶもの、その他沿岸の物資を各地へ運ぶものなど船の利用も盛んで、その船に働く人も多く、また船を作る船大工もたくさんいました。その他沿岸の埋め立て工事に働いたり、漁民として働いたり、石工として働いたり、仕事のあるところへ出かけて行って広い世間を見ました。女たちはまた女中奉公に行くものが多かったのです。

このような状況は明治、大正、昭和と続き、帆船が発動機汽船や汽船にかわっても人はみな同じように働き、お金ができると良い家を建てました。そして立派な家の並んでいるようなところはたいてい出稼ぎの盛んなところでした。それが昭和30年ごろ沿岸の各地に石油、パルプ、造船、製鉄、繊維関係の大きな工場が立ち並ぶようになり、人々は次第に外へ働きに行くことになります。ところが今まできれいだっただ海はいつの間にか汚れ、魚介もずっと減ってきて、島人の生活も大きく変わり始めました。そして出稼ぎではなくて島を出て他へ移住する人が次第に多くなってきたのです。今この海のほとりに昔から住んでいる人たちは、どのようにしたらもう一度住み心地よい土地に返すことができるだろうかと真剣に考え始めています。宮本常一』

これが40年前のものです。江戸の頃から40年前のそのときのことを、瀬戸内海とはこんなところだったと書いています。それをうけて実は瀬戸内海の中では宮本常一さんが瀬戸内海というものを読んでという記述をしているのですが、大崎上島について中国新聞の記者の方が書いた項目があります。ちょっとすみません、長くなって申し訳ないのですが、瀬戸内海そんな中であって当時大崎上島はどうであったか。

『大崎上島。広島県豊田郡。今から約1000年前、土佐の国から都へのぼった紀貫之の日記から見ると、日本の船は長い間底が平らであった。丸木舟の少し進歩したものであろう。このような素朴、幼稚な昔の大和船（ばいせん・やまとの船と書きます。）から西欧技術を取り入れて船の動揺、船の抵抗を少なく波切りの良い今日の木造船を作ってきたのが大崎上島である。この島は木江町、大崎町と東野村の2町1村、役22000人の人口で

構成され、木江は木造船業者が集中、東野村には国立商船学校があり木造船に付随した鉄工所、船具販売業者が多く、ひとくちに言えば大崎上島とは木造船と船乗りの島ということになる。』

これ50年前です。

その船を作るにあたってということで、

『300トンの木造船1隻1千万円を作るには船体材料50%、エンジン30%、船具・ぎ装品20%の割合で関係部品が調達される。この内、船具・ぎ装品は大崎町、東野村の地元調達である。だから大崎町、東野村両部落の生活も木江造船業界の好不況に動かされていることになる。こうした島の生活に満足しない若者は船乗りを志願して船員生活を送っている。大崎町、東野村には米国港航路、欧州航路についているものが多く、町には若い男が少ない。結婚適齢期の層をみると男が女のほうの半分しかいなかった。この島では昔から船に乗ることがうまく、江戸時代に北前船といって新潟の米を京阪神に運び、京阪神の雑貨、瀬戸内海の塩を新潟へ輸送した北廻りの海運界は大崎上島の人だったといわれている。』

かいつまんで少し長くなりましたけれども、そういった形で瀬戸内海というものがどうであったか。50年前の大崎上島がどうであったか。そういうことを先ほどの前半でのお話をかみ合わせながらこれから4名の著名なパネリストの方にそれぞれの立場でじっくりとご発言をいただきたいと思っています。ご発言をあたります前に、今日も本をそれぞれご紹介するというやり方をとりたいと思います。それでは最初のパネリストの石原館長さんをご紹介したいと思います。

『熊野灘を歩く 海の古道案内』（会場に見えるように）

海からたどる熊野灘のあらたな魅力

熊野灘は太古から太い海上の道であった。大王崎から潮岬まではるばる続く海岸線をたどる時、そこには豊かな歴史と生き生きとした文化が残ることを知る。だからこそ今、熊野灘が面白い

ということで、熊野灘をこよなく愛する先生の方から最初のパネルディスカッションの先陣を切っていただければと思います。どうかよろしく願いいたします。